

今年度は私が勉強している文化人類学という視点からお話をしたいと思います。文化人類学は世界各地の様々な文化を調べて「人間とは何か」を考える学問で、同時に自分の文化の見直しをさせてくれます。ひとつ例を挙げてみましょう。

私たちは当然のように性別は女性と男性の二つと思っています。そして男の体で男の心というように心と体が一致していることが普通で、違うと障害とされます。性同一性障害です。しかし、障害とみなさない社会もあります。各地で呼び方は違いますが、文化人類学ではそれを「第三の性」として研究しています。例えばインドにはヒジュラという第三の性があります。男女に加え、性別にヒジュラがあると思ってください。日本ではそのような人は障害があるとされますが、インドではそうではなく、ヒジュラはヒジュラという社会的に認められ性になっています。



周知のように男女だけの性に苦しんでいる人が日本に多くいます。そのような人は書類にある性別の欄で男か女か、どちらを選べばいいのかわからないことがあるといいます。もし性別欄に第三の性があればどうでしょうか。迷う必要もなく、障害と思わなくてよいかもかもしれません。第三の性を加えるのは変だとも思いませんが、オーストラリアではパスポートの性別の欄に「X」が加わりました。女性とも男性とも思わない人が選ぶ性別です。

日本でも第三の性があればどうでしょうか。生まれたままの自分の性のあり方を肯定できるかもしれません。世界の様々な文化を見ることで自分の文化を見直す。当たり前が当たり前でないと知った時に楽になることもあります。第三の性はそれを教えてくれます。

文：県立広島大学 上水流久彦 講師

イラスト：県立広島大学 ロナルド・スチュワート准教授

2013(平成 25)年 広報あきたかた 5月号掲載